

---

# 狂気の歌姫

黒和桜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

狂気の歌姫

### 【Zコード】

Z9262Z

### 【作者名】

黒和桜

### 【あらすじ】

少女が連れて来られたのは真っ白な施設。

一人…また一人と連れて行かれ一度とは戻っては来なかつた。

博識であるが故、狂気

暗い森のサークス

を基とした物語です。

サークス

森のね

奥の奥に

あるんだ

そのサークス

カラカラカラ…

街の中心部ともいえる噴水の前に愉しげな音を響かせる馬車が来た。

街行く人々は足を止めて馬車を見る。

中からは可愛らしいピエロの格好をした女の子が出てきた。

『ああ、お立ち合い！暗い森のサークスの開演だよ！嬉しい嬉しいサークスは如何？』

ピエロは踊りながら曲に乗せて歌う。

手に持っていたビラを道行く人に華麗に渡していた。

『ああ、どうぞ。』

不意に田の前にピエロが来てにっこりと微笑みビラをくれる。

それには大きなテントとテント以上に大きな背の人、ピエロなどが愉しげに描かれていた。

場所：森の奥（可愛いピエロたちがお連れします）

開催日：本日夕刻日

何とも曖昧な内容だったが、初めてのサークスに心が踊り

私はサークスを見る事にした。

博識であるが故に

あるひ

きれい

しひい

へやこ

つれて

こられ

ずっと

元々

頭がボーッとする。

一面白で包まれていた。

冷たい床から身体を起こして何故、自分がこんな場所に居るのかを考えた。

それは突如として私を奈落の底へと突き落としたのだ…

私は歌が好き。

いつも唄を歌っていた。

ソレガイケナカツタノ?

私には一人、家族が居る。

お兄ちゃんも歌が大好きで作曲をしていた。

いつも作曲した歌を私が歌つて…

そんな平凡で楽しい日々を暮らしていた。

でも、それを壊した人物が現れた。

それが私を「」に連れてきたの…

ゆっくりと立ち上がりて部屋を見回してみる。

扉があるだけの他に何も無い真っ白な部屋。

扉に近付いてみた。

内側からは開けられないようになつてゐる。

ただ、扉には鉄格子が付いている小さな覗き窓があつた。

鉄格子に手を掛けて外を覗いてみると、見えた廊下すら異様なま  
でに真っ白だつた。

田の前にも部屋がある。

同じ様に小さな窓が付いていて、その部屋も真っ白のよつだつた。

…此処はドコなの？お兄ちゃんは…。

涙を拭うと今更ながら服が違つことに気が付いた。

ワンピースを着てた筈なのに部屋と同様、真っ白な服を着ていた。

只唯一、胸元には〇一と赤い刺繡があつた。

もう少しの位経つただろ？

どれほど時間が経とつとも部屋の明るさは変わらず綺麗な白。

さつともつ夜だろい。

冷たい床に寝転がり無音の世界に音色を響かせる。

「」に連れてこられる前に、お兄ちゃんが作った歌。

それに同調するかの様に不意に足音が聞こえてきた。

「」……

足音はまだ遠い。

私は歌のを止めて足音に耳を傾ける。

「」……

わづくつ立ち上がり窓から廊下の先をジッと見つめる。

「」……

段々と近づく足音

「」……

ガチャツ！

扉が開く音だけが鳴り響く。

私の部屋の扉ではなく、少し遠くの扉が開いた。

# 真っ白な空間に初めて見る人影

部屋の中からほ女の子が連れ出された

黄色い髪に白いーホン

自分と同じ真の白な肌

手を引かれて私の部屋の前を通り過ぎていった

तद्वितीयता तद्वितीयता तद्वितीयता तद्वितीयता तद्वितीयता

ミシミシミシミシミシ...

ニシニシニシニシ...

「ツ…ツ…

バタンッ！

扉に入った後は何か聞こえたけど、それが一体何なのか…分からなかつた。

今日はそれだけ。

もう人の気配はせず、私は隅っこに座つて目を閉じた。

オ兄、チャン…ドコ居ルノ？

お兄ちゃんも此処のどこかの部屋に監禁されているのだろうか…

何事もなく生活出来ているのだろうか…

私ヲ…心配シテハイナイカ…

カラソカラソカラソ

頭の奥で音がした。

目が覚めても何も変わらないし朝なのか昼なのかさえ分からなかつた。

また立ち上がりつて鉄格子の付いている小窓から廊下を見る。

「誰もいない…

「誰か、いないの？」

声を張り上げるでもなく普通に話すように声を出す

「ダレ？」

意外にも返事が帰ってきた。

男の子の声。

覗いた前の部屋の鉄格子から顔を出す。

昨日連れて行かれた子と似ている。

黄色い髪に青い瞳。

私より年下の様だ。

「私、ミク。昨日連れられて来たの。あなたは？」

「……レン。大分前からココにいる

そう言つてレンは部屋の奥に戻つた。それでも構わず話は続く。

「ココは何なのか知つてゐる?どうして連れてこられたんだ?」

「さあ…。分かることは毎晩一人連れて行かれる。帰ってきた奴  
はいない」

私は扉を背に膝を抱えて座った。

## 赤い部屋

きれいな廊下に

きれいな部屋があるの

夜には一人づつ連れて行かれてるの

何日が過ぎたのか分からぬ…ただ毎日が同じ日だった。

真つ白な部屋

真つ白な廊下

毎夜連れて行かれる子

そして戻つてはこない

自分の番はいつなのだろう…

私はまた歌を歌う。

壊れたレコードの様にずっと…

ズット。

歌を歌つてるとまた足音が聞こえてきた。

コシコシコシコシコシ…

其れは私の扉の前で止まつた。

私の番？

部屋の隅で膝を抱えて扉を睨んでいると

ガチャリ…

扉が開く音がした。

私は反射的に手をギュッと閉じた。

ドキドキドキドキ…

胸が壊れそうなほど早く

部屋に響きそうな位大きく鳴る。

ドキドキ…ドキドキ…

言い知れない恐怖が襲つてきた。

私をココに連れてきた人ガ居ル……。

震えながらも思い切つて目を開けた。

しかし其処には人なんか居なくて

コツコツ……コツコツ

足音だけが廊下に響き渡る。

私はゆっくりと立ち上がり鉄格子を覗いた。

人影がある。

それは目の前のレンがいる部屋。

人影はレンより大きくて……。

チラツと見えた横顔は狂喜に満ちていた。

部屋同様に真っ白な服。

何かを振り上げる影。

人間とは思えない悲鳴が私の耳を突き刺した。

花が咲いた

真つ赤な深紅の花びらが舞う。

真つ白な部屋は艶やかな赤に染まった。

悲鳴は消えていた…

赤い部屋は以前お兄ちゃんが連れて行つてくれた花畠に似ていた。

どうりと赤い花びらが部屋を染めて花畠になる。

ギイ…

レンの部屋の扉が少し開いた。

青い髪の男の子。

初めて見るその子は四つん這いになつて何かを口に咥えていた。

丸い赤いボール…

大きな人影が青髪の子の頭を撫でる。

まるで飼われている犬のように。

「じゅんと咥えていたボールが落ちた。」

„JNIGIJN...“

転がつて廊下に露わになつたソレは真つ赤なボールなんかじゃない。

黄色い髪

青い瞳

真つ赤な鮮血を纏つたレンだつた。

青髪の子がパクリと喰べる。

その子と田が合つた。

カラソカラソ

何かが壊れる音がした。

きれい おはな まつか さじて

ひとつ へやが おはな ばたけ

まるい きれい いじわん おひる

まちが たべる それを ぱくり

## 暗い森の

座長は大きな眼に高い背10m

キャストはみんな愉快

形は変だけれど

とっても嬉しいんだ！

暗い森のサークス

夕刻

私は森へと赴いた。

『よつこや！此方へどうぞ』

元気な声と共に今朝とは違つ男の子のピエロが迎えてくれた。  
鮮やかな色のピエロに着していくと大きなクリーム色のテントが  
見えた。

『「」のチケットを渡して下さー！では僕はこれで』

ピエロから渡されたのは赤い長方形の何も書いてない紙。  
ありがとうと礼を言つとこいつと微笑むとピエロはまた森へと  
入つていった。

テントに近づくと、ずっとそれは大きかった。

出入り口の所に受付と書かれた看板。

中を覗くと黒くろくめの歯だけが真つ白の人人が座つてゐる。

胸元を見ると、『座長』と名札が付いていた。

座長さんにチケットを渡して中に入ると沢山の人で席は埋まつて  
いた。

唯一目についた椅子に腰掛けで薄暗いステージに目を向ける。

『本田はよつこー！暗い森のサークスの開演ですー。』

暗いテントの中に響き渡る元気な男女の声。

それが合図のよつに眩しい程のライトが点いた。

広いステージの真ん中にスポットライトに照らされた奇妙なピエロが一人。

身体は普通の人なのに顔が二つある。

双子なのかそつくりな顔立ち

金髪の白いリボンをした女の子と

金髪の青い瞳の男の子。

観客達にお辞儀をしてサークัสが始まる。

それは奇妙にも驚くほど私の心に響いた。

火の輪を華麗に潜る人

空中でブランコに飛び移る人

様々な芸は私だけではなく観客全員が魅入られるものだった。

『さて次は珍しい獣をご覧あれ』

低いナレーションと共に赤い服を身に纏つた綺麗な女人と布が掛けられた箱が出てきた。

女人がふわりと布を取り去れば出でたのは頑丈そうな櫻。

中には首輪を掛けられた青い髪の人人が居た。

観客達のざわめきをかき消すよつに檻の中の人間が唸り吼える。

それは正に獣だろう。

鋭い目が私を捉えた

一瞬寒気が走る。

牙は鋭く爪も人間のものとは思えない。

力チャリ

檻の錠の外れる音。

ゆつくりと檻から出てくる獣。

首輪には鎖が付けられていて冷たい金属音が鳴り響く。

『一見人に見えるでしょう。…しかし外見に騙されてはいけません！肉を好む野生の獣です』

ナレーションの後

美女がっこりと微笑みを浮かべて観客席を見回し始めた。

すると私と目が合つた。

綺麗に微笑み掛ける美女

そして口を開くと

「そここの彼女にしようかしら…ステージに上がつて手招きされてしまった。

躊躇しながらも立ち上がりステージへと上がる。

「あ、あの…私何をしたら」

緊張を隠せない私の肩をポンと叩いて

「ここの子に餌をあげるの」

「餌つて…あの…」

不安を抱える私に生の肉を渡して、また微笑み掛ける美女。

「大丈夫。大人しい子だから」

励ましを受けて一步を踏み出した。

「ああ、みなさま。これからこの子の餌付けが始まります！」

「キドキ…

緊張感でか胸が高鳴りながらも獣の前まで行き冷たい生肉を差し出す。

相変わらず獣は私を鋭い眼孔で捉えたままゆっくりと近付いてきた。

手の平から生肉を口に呑わえると歯の中に戾り、それを食べ始めた。

緊張が緩んだ私は安堵の息を吐き出して自分の席へと戻った。

## 狂氣

あしたは わたしの でばんよ

たのしみな

あしたは わたしの でばんよ

たのしみな

ワタシ ワタシ ワタシ ワタシ ワタシ...

真っ白の部屋

無音の空間

レンが居なくなつた部屋をジッと見つめる。

昨日の真っ赤な花畠は嘘のように真っ白に戻つた。

毎晩連れて行カレ一度トハ戻ツテコナイ。

その意味が深く黒く私の脳裏に染み付いた。

何故か恐怖はなかつた。

ただ

ああ…次は私の番…

まるでそれが日常の一部のように思える。

もう、お兄ちゃんには会えないのね…

そう思つと一筋の涙が零れた。

怖いとかじやなくて寂しさが募る。

でも何故だらうか

この真っ白な世界から抜け出せる。

そんな思いも喜びと共に私を洗脳する。

カラソカラソ

頭の中で音が鳴った。

それが合図かのよろこまた私は歌を唄うのだ。

一つ頭もの

異形の歌姫に

冷たいもの食べるの青い獣が

望まれて生まれてきたわけじゃないこの躯

なんでそんな田で見るの

顔が腐つていく

パツと照明が切れて辺りは闇に包まれた。

「次は我等がサークス団の花！歌姫の優美な歌声を！」堪能あれ！」

ナレーションの後、ステージ中央にスポットライトが当たられる。

そこには一人

純白のドレスを身に纏つた美しい女の子がいた。

でもその異形な姿に息を飲むほか私にはできない。

美しい縁の髪を結い

絹のよつに白い肌

パチリと大きな瞳は髪と同じ美しい縁。

何故か右目…といつよつ顔半分右は青と白の花で覆い隠されている。

袖から覗かせる指は長くも綺麗だ。

ただ違つところといえば

足。

まるで下半身だけ獣と結合したかのよつ。

白馬の足だらうか…

そして異形の歌姫は心地良い歌を歌い始めた。

美しい歌声

華やかな歌詞

でもそれとは別にジジが悲しげでもある

-----  
望まれて生まれてきた訳じゃない此の躯

なんでもんな田で見ているの

顔が腐つていく

苦しこよ苦しへ仕方がないと彼女は言つたんだ

それでもこのサークルは続していく

愉しいよ 愉しいよ

この サーカス は 愉しい

腐った 実

溶ける 田に 爛れた 顔が 映るの

死にたいよ 死にたいよ

此處から 出して 下さい

それは 無理な 事と 誰か が 言つて いた 気が する - - -

聞こえる歌声。

それとは別に歌が脳裏に入ってきた。

愉しそうに歌っているのに

私に伝わってきた悲しい歌。

きつと彼女の心は、もう壊れているのだろう…

儂い狂気に満ちた歌姫に私は心を奪われた。

いや…歌姫だけでなく奇妙なピエロにも。

人間の姿をした野獸にも。

私はこのサークスに心を奪われたのだ。

まだ歌が耳に残る中

サークスは幕を閉じた。

観客席からは盛大な拍手。

人の海から解放されれば月明かりの森へと出る

灯りを持つたピエロが私たちを街まで送ってくれた。

人々は愉しげにサークスの話をしながら家路に急ぐ。

私は一人今出てきた森の入口を見ていた。

『今日は愉しんで頂けましたか?』

話し掛けたのはあのピエロの子。

「ええ、とつても。また見たいわ」

大きく頷いて見せるとピエロはにっこりと笑みを浮かべる。

「ねえ、あのサークัสの人たちつて変わってる人ばかりね。私も特技があれば入れるかしら」

『冗談混じりに』ピエロに問い合わせれば意味深な言葉を返してきた。

『ええ、お姉さんも壊れたら入れますよ』

にいつと不敵な笑みを浮かべたかと思えば一礼して森へと帰つて行く。

壊れたら入れる

その言葉に首を傾げながら考えたところで答えが分かる筈もなく

私は家へと帰つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9262n/>

---

狂気の歌姫

2011年10月8日01時07分発行